

書評・紹介

光地英学著

『親鸞教学と道元禅——浄土教と禅——』

鎌田 茂雄

禅と浄土教は中国仏教が創造した実践仏教の精華である。もちろんインドにおいても禅経が存在し禅觀思想が説かれたし、浄土經典の原型もまた存在しており、浄土についての觀想は説かれたが、見性成仏を標榜する南宗禅や口称念仏を主張する善導の浄土教は、仏教思想史に革命を与えた新しい実践仏教であり、それは日本仏教において見事に完成されたものである。その頂点にあるのが親鸞聖人と道元禅師である。

本書は親鸞教学と道元禅に関する論究である。親鸞教学とは「親鸞聖人を中核とする浄土思想を指し、道元禅といった場合、道元禅師を主体とする禅思想を意味する」(緒言)。禅学者が浄土教を理解したり、研究したりすることは至難の技である。鈴木大拙博士の名著『禅と念仏の心理学的基礎』も禅者の目か

ら見た念仏の理解になる。私も最近、一遍上人について書いてみたが、どうしても禅学者の目から一遍上人を見てしまうことは避けられないと思う。著者は本書撰述の態度についてつぎのように説かれる。

概して禅者、特に学者が浄土教をみる際、禅眼から着色してみる。一遍上人などの例をとって、ことごとく禅的に念仏を理解せんとする傾向がある。これも一の見方であることには相違ないが、それは念仏の眞の理解ではない。浄土教者が禅をみる際、偏えに自力教として否定し去ろうとする。外からではなく、先ず内からそのものをそのままに見ることが肝要である。禅を飽迄禅そのものとし、浄土教は飽迄浄土教そのものとして、在るがままに見ることが第一に心すべきことである。

本書は四編よりなる。第一編「序説」においては、親鸞・道元以前のインド・中国・日本における禅浄交渉史を概観し、さらに両聖の人と宗教、および時代的背景を明らかにする。第二編は親鸞教学を、第三編は道元禅についての論究であり、それぞれ、行・信・証・仏身・仏土の五綱目にわたって考究し、さらに両教を比較する。第四編は本書の結論にあたる。以下、本書の内容を略述する。

第一編「禅浄の關係論」は二章に分かれる。第一章はインド・中国・日本における禅浄關係を述べたものである。第二章「親鸞・道元考」は鎌倉仏教と禅浄二教について論述し、両聖の性格と宗教を明らかにする。中国仏教における禅浄双修の始めを僧頭に求めるが、眞の双修の起源を慧遠の白蓮社としている。禅浄關係史の考察の結果、両教の關係を、禅浄双修と禅浄相関としており、己心の弥陀思想や念仏禅は禅浄相関に入るとする。

第二章「親鸞・道元考」は鎌倉新仏教における両聖の生涯を概観し、禅浄交渉をもった人々をあげ、さらに両聖の性格と宗教について述べている。両聖の同姓性として(一)氏姓の同轍、(二)両親との死別と出家、(三)比叡山の学習、(四)弘法地、(五)名利を嫌う、(六)学道の貧、

(七)現世祈禱の排除、(八)儒道二教に同調しない、(九)父母のために仏法を行じない、(十)気品高い名文家である。(十一)宋の文化受容と秀逸な書風、(十二)何れも中国高僧の後身、(十三)一宗を開創し、自ら宗祖たることを認容していない、(十四)人格の高邁性などをあげている。つぎに相違性については(一)親鸞は主情的・女性的・柔和性・調和性・凡夫型の人であるのに対して、道元は主知的・主意的・遮情的・男性的・強靱性・孤高性・聖者型の人であるとする。(二)聖人は妻帯裡俗の生活をしたのに対して、禪師は梵行生活に終始した。(三)聖人は民衆とともに生きたのに対して、禪師は超俗孤高の人である。(四)親鸞は非僧非俗の愚禿意識に徹したのに対して、道元は正法伝持の人を以て任じたところに相違点があるとする。

さらに二聖の宗教思想の相違点について(一)親鸞は弥陀教であるのに対して、道元は釈迦教である。(二)親鸞が他力教であるのに対して、道元は自力教である。(三)親鸞が信の仏法であるのに対して、道元は行の仏法である。(四)親鸞が在家主義なのに対し、道元は出家主義をとる。(五)親鸞は機に立つのに対して、道元は法に立つ。(六)親鸞の『教行信証』には体系があるが、『正法眼蔵』にはそれが無い。(七)親

鸞が仏教革新を意図しなかったのに対し、道元は革新的抱負をもっていた。(八)親鸞は聖徳太子を尊崇したが、道元は関心がなかった。(九)親鸞は造寺造塔しなかったのに対し、道元は坐禅弁道のための僧堂を造営した。(十)国家的関心の相違がみられるなどの十四ヶ条をあげている。

第二編「親鸞教学」は第一章「行の問題」以下、信、証、仏身、仏土の五章よりなる。

第一章「行の問題」では真仮の判釈と七祖の選定、他力易行道の発展、念仏の史的展開、如来直爾の絶対行、行修念仏と報恩念仏が説かれていく。第二章「信の問題」では対機論、廻向論、三心の義趣、唯信正因、菩提心、行信論について論述され、第三章「証の問題」は他力証果思想の展開と親鸞の証果論が明らかにされている。第四章「仏身の問題」では、先駆諸師の仏身観、と親鸞の仏身観とが述べられており、第五章「仏土の問題」では先駆諸師の仏土観、親鸞の報土思想と化土思想が明らかにされている。

第三編「道元禅」も第二編と同じく行の信証・仏身・仏土の項目によって章をたてる。第一章「行の問題」では生活諸行、打坐一行の主張との決着が論ぜられ、さらに親鸞と道

元の行思想の相似点と相違点を明らかにする。第二章「信の問題」については、機根論、時代観、懺悔と罪悪性、因果業報思想、信の必須性、信の本質構造、発菩提心の意義を明らかにし、親鸞と道元の信思想の相似点と相違点を明らかにする。道元禅には自力主体性が強力であるが、そのみでなく他力性もあり、自力と他力が融摂しているのに対して、親鸞教は他力一乗に徹しているとする。

第三章「証の問題」では、生死観、心性観、仏性思想、覚証の意義、二教の証思想の比較が論ぜられている。とくに念仏三昧と妙修三昧、没蹤跡、柔軟心、証悟、救済と本証の現実態、獲信の必順性と覚証、獲信と覚悟の覚知問題、行修念仏と待悟の各否定、宗教的生活相、本願と本証、還相廻向行と発願利生、得道の至難性、自然法爾と身心脱落、即心是仏、心不可得性などの二聖の比較が興味深い。第四章「仏身の問題」では法身仏思想、行仏思想、史上の仏陀、即心是仏、道元禅における仏身観の特質、弥陀と釈尊、二教の仏身観について述べている。第五章「仏土の問題」では、十方仏土、唯心仏土、自性の寂光土、両教の仏土思想、仏身と仏土などについて述べている。

第四編「親鸞道元両教論」は本書の結論部分にあたり、著者の考え方がはっきりと提示されている。第一章「両教論」においては、まず二聖の思想が要約される。結論的にいえば信一乘の宗教が親鸞教であるのに対して、行挙揚の宗教が道元禅である。両教の無我相としては、親鸞教は如来の本願に生きて自己に無となるのに対して、道元禅が本証に生きて小なる自己に無となる。ともに無我となる

の帰着点」において、両教の一致面と相異点を明らかにする。一致面としては念仏三昧と禅定三昧、獲信と見性、そして三世因果業報を信受し、仏教の本質である無我を本領としている点をあげる。さらに根本的な一致点として無窮の菩薩行をあげている。その不一致面として極楽往生と十方仏土往生、来世思想肯認と来世思想に対して消極的であることをあげている。

に燃え、意義深い内容豊かな現在ただ今を全分に生きてゆく。両教を踏まえたお互いの仏教的人生はかくあるべきものと信ずるものである」と結んでいる。

本書は総ページ一六四六ページにわたる歴大な著書である。著者、光地英学博士が親鸞と道元についてこれだけの鬱然たる大著を著わされたのは、両聖に深いかかわりがあったからである。それは「緒言」の冒頭に「筆者は浄土真宗の王国といわれる富山に生を受けた、生縁及び多くの親族は、大谷派でなければ本派であるという如く真宗以外の人は全く居なかった。それが、ふとした縁に依って少年時、禅（曹洞）寺院の徒弟（得度）の身となり、やがて駒沢大学に入学し研学することとなった。大学入学当初から、禅浄関係が学的関心の主流であったのも、かかる仏縁の効すところに他ならなかったといつてよい」と自ら語られておられる。

点は同一である。第二章「両教と諸問題」では人間と仏、仏と衆生、他界思想、霊魂の問題、心霊科学の問題などを論じる。著者が心霊科学に深い関心を払っているのは「霊が宗教、仏教の基礎的重要事であり、これが一切の根基であるといつても、あながちいい過ぎではないと思われる」（一三九九ページ）という理由からである。ついで仏及び浄土の实在性を論じる。とくに止観による仏・土の感見、念仏三昧による見仏を明らかにし、仏・浄土の实在の根拠を提示しようとした。同一意図のもとに浄土教者や禅者の瑞相・奇瑞・霊夢について考察する。さらに両教と他界の仏・土を明らかにし、道元禅は此土が中心であつて、他在の浄土往生を志求しないのが、その本領であるとする。ついで第三章「両教

以上、本書は親鸞と道元との教学について、それぞれ別々に論究し、ついで両聖の教学を比較検討し、その相似性と相異性とを明らかにしたものである。著者は最後の「跋」文のなかで両教を含めて仏教信仰のあり方を「三世因果業報の理を信じ、諸仏諸尊、仏土の实在を仰信し、現在自己のでき得ることに余分の努力を惜しまず、自力の及ばない領域については仏力に依憑する。常に自己の生かされていることに感謝し、世の為、人の為、更に一切の為に未来際を尽くして、利他の行願に生きる。かかる行願を胸裏にして、今日一日、否、而今一瞬を充実してゆく。充実した而今は永遠に連なる今でなければならぬ。永遠とは他ならぬ浄土であり、そこへの往生である。往生浄土を欣求しつつ、希望

思えば今から三十年前、筆者が大学院を出て、日本印度学仏教学会や宗教学会や、駒沢大学の宗学大会などに出席していた頃、光地英学博士は、ひたすら一貫して禅と浄土教関係について御発表されていた。それは求道者の如くひたむきなお姿であった。それは五十

年にわたるただ一すじの学道の道であった。その成果がこのような大著となつて結実したのである。宮本正尊博士がかつて光地博士に、自己の代表ともいふべき著書は、生涯にただ一冊にてよいと申された、ということ、筆者は光地英学博士からうかがつたことがあるが、まさしくその生涯にただ一冊の大著こそ本書にほかないのである。それは光地英学博士そのものといつてもよいのである。しかも五十年の学的精進の集大成なのである。博士の精進がなみだいていのものでなかつた証左が本書の刊行なのである。まさしく著者のライフ・ワークといえよう。

本書のなかには心霊科学に関する記述が少なくないが、筆者もまたスエデンボルグや福来友吉博士の著書をしばしば読んでゐる。正統(?)的な大学の仏教学では心霊の問題はあつかわれないが、心霊現象の重要性は筆者もまた認めるものである。仏土や仏身の実在、他界思想などの問題をどこまでも問いつめてゆくならば、かならず心霊の問題に逢着せざるを得ない。それは著者が「その念願するところは、両教の一致点を踏まえながら、一般人の眞の救いを探求するということに他ならぬ」といふ(緒言)と言われているように、眞の救

いの探求にあつたからこそ、心霊問題にも鋭く深く閑説せざるを得なかつたのである。

本書を前にして、研究者として一番大切なことは、多年にわたる研鑽であることを痛感する。「継続は力なり」といわれるが、一事を究めつくすことに五十年の歳月をかけるこ

山内舜雄著

## 『道元禅と天台本覚法門』

池田魯參

とによって、その成果は限りなき巨大なものとなることを知るのである。これから研究に志ざす若き研究者に本書の重みをしっかりと

かみしめてもらいたいと思う。  
(山喜房仏書林、昭和五十九年一〇月二五日発行、A5判、三八、〇〇〇円)

### 〔一〕

三十余年にわたる御研究の、蘊蓄の一端を、この度、八百頁を越す大冊にまとめ、

昭和六十年、駒澤大学特別研究出版助成をえて『道元禅と天台本覚法門』と題して公刊された。著者の山内舜雄博士の御壮拳に対し、博士の学恩に浴することの多い学究の一人として、心から慶祝の意を表したい。とうてい私ごときに堪えうる任ではないと弁えるのであるが、いささか関係の研究をさせていただいている御縁もあり、博士からの御下命を受け

たことでもあるので、新刊紹介の意味をこめ、ここに一文を認め、博士の多年の御労苦に対し私の微意を呈するものである。

本書で扱われた問題解明の方法が、いかに広範囲に及ぶものであるかを知るには、目次にしたがつて本書の構成を一覧するのが一番である。本書は次のような構成である。

序論 問題の所在―「本来本心性」疑團の解明と「本証妙修」の源流を求めて―

本論第一部 日本天台における本覚思想と道元禅